

笹本征男さんへの弔辞

在韓被爆者問題市民会議運営委員 小田川 興

笹本征男さんへの弔辞 笹本さん、あなたのあまりに急な旅立ちに、いまは言葉もありません。

亡くなる2週間前、東京医療センターにお見舞いした時、あなたは全エネルギーを傾けた不朽の労作である『米軍占領下の原爆調査——原爆加害国になった日本』がやっと今年夏、NHKのドキュメンタリー番組で取り上げられることになったと、さっきまでくすんでいた顔を紅潮させて語りつづけ、帰り際に明るい表情で「間もなく退院するよ」といわれ、私も「じゃ今度は、市民会議の運営委員会でね」と握手して別れたからでした。

私が笹本さんと会ったのは、在韓被爆者援護運動で中島章美さんから紹介されたのが初めてで、かれこれ30年以上も前のことです。当時、朝日新聞大阪本社でこの問題の取材を続けながら、「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」を立ち上げ、東京の中島さん、広島の高永さん、また長崎の方々と連帯しながら、細々と運動を始めていただけに、笹本さんは頼もしい仲間で

した。

彼の当時の活動の中心は占領史研究にありましたが、在韓被爆者援護の実現に向けて問題を一層深く掘り下げる必要を感じた中島さんが笹本さんを誘ったのでした。

その中島さんが一昨年1月にやはり急逝されたショックから癒えぬまま、あなたは病軀を駆って、中島さんがやり残した仕事を継承、発展させる覚悟を決めて、在韓被爆者問題市民会議の代表を引き受け、在韓被爆者だけでなく、あらゆる外国人原爆被害者の援護獲得のため、国会での議員と在外被爆者代表との会合やカンパ活動に奔走されました。

この間、韓国人被爆者自身の努力と日本の市民グループの協力で、裁判闘争が勝利し、在外日本公館で被爆者手帳の申請が可能になるなど、在外被爆者対策に一定の改善が図られてきました。高齡化が進む被爆者の渡日治療や原爆症認定のあり方など、課題はなお山積しております。

その一方でこの間、韓国原爆被害者協会を率いた辛泳洙さんはじめ多くの被爆者が亡くなりました。ここ数年は、在米被爆者協会の倉本会長、在ブラジル原爆被爆者協会の森田会長の綾子夫人と、在外被爆者運動のかけがえないリーダーたちが相次いで逝去されました。

まだまだ険しい道が続く在外被爆者援護運動のなかで、あなたを失ったことは大きな痛手です。が、残された我々は力を合わせて中島さんとあなたが切り開いてきた道をさらに広げていく努力をしなければと思います。

笹本さんはここ2、3年、「国際関係と科学・技術」研究会で米日韓・北朝鮮関係のなかの韓国・朝鮮人被爆者について発表され、その成果が実って、昨年夏にはケンブリッジ大学ニードム研究所の国際会議に参加されたの



は、あなたにとってまさに人生の輝く時だったことでしょう。

最後に会った医療センターで、あなたは原爆調査でアメリカに協力し、被爆者の医療と援護に冷酷だった日本政府の正体を見据えて、それがほとんど反省なく継承した「大日本帝国との戦いこそが、市民にとって最も重要だ」との持論を再度強調しました。

笹本さんは、自分のライフワークは「米国の原爆投下責任の追及である」といつておられましたね。

その米国に登場したオバマ大統領が、原爆投下の道義責任に触れて、「核なき世界」をめざす考えを表明。「核不拡散と核軍縮」をテーマに国連安保理を主宰するなど、新たな状況が生まれてきました。鳩山政権の東アジア共同体構想も同じ文脈で期待したい変化です。

笹本さん。あなたは、そうした21世紀の潮流に勇気を得て、人生の残り火をかきたくてのように最後の瞬間まで己の信ずる目標に向かって全力投球しました。

その魂と成し遂げた仕事の数々は、人類の明日を照らす光でありつづけるでしょう。

どうか、安らかにお休みください。

2010年3月25日

笹本征男さんを追悼する

市場 淳子（韓国の原爆被害者を救援する市民の会・会長）

今年の2月、笹本さんから日本科学史学会の英文誌『Historia Scientiarum』が届いた。「違いを超えて…日韓米における核の歴史の国際比較」という特集号で、韓国に関しては、笹本さんの「韓国原爆被害者」を始め、「架空の救世主…韓国における核爆弾のイメージ、1945～1960年」「電力のための原子?…原子力研究所と韓国の電化、1948-1965」「外交交渉下の技術移転：1970年代の韓国核燃料計画の再評価」という4本の論文が掲載されていた。在韓被爆者問題を「韓国の核」という広い視点から考えるきっかけを与えてくれた。

3月に入って笹本さんにお礼のメールを差し上げたところ、笹本さんから「解放後の韓国における米の原爆についての韓国側の観点が、興味あります。今、病院に入院しています。前立腺がんに抗がん剤治療のためです。一昨日、投与を終わりました。これから副作用が出るようです。この病院は、中島竜美さ

んが亡くなった病院です。今、私は三階の病棟ですが、中島さんは、四階の救急病棟でした。まるで彼が最後に私に会いに来てくれた、よくなき気がしています」というメールが届いた。それが笹本さんと言葉を交わした最後となり、日本科学史学会誌は、笹本さんと意見交換できないまま、形見となってしまった。

なぜ、日本政府は、原爆投下国のアメリカに代わって、被爆者援護を全面的に引き受けてきたのか。その対象範囲は、在外被爆者裁判の相次ぐ勝訴によって、今や、世界中の被爆者へと広がっている。この疑問を解く鍵は、笹本さんが生涯の研究テーマとされた「米軍占領下の原爆調査」の周辺に、「日米核密約」のような形で埋もれているのではないかと思うのだが、笹本さんは、その謎の解明という大きな仕事を遺して急逝された。今ごろは、中島さんとその議論をされているかもしれない。折にふれかけてくださった励ましの言葉が心に温かく残っている。

笹本征男さんを偲んで

韓国の原爆被害者を救援する市民の会 広島支部長 豊永恵三郎

もう十年前だったろうか、在外被爆者救援で国会に行った時、笹本さんが衰弱して元気なきそうだったので、早く病院に行くように言った。それからすぐに前立線ガンで手術ができない状態だと聞かされた。しかし以後気丈に闘病生活をつづけられた。

今年一月に来広され、NHKの企画で八月まで番組を作るのだと熱く語っておられたのに、突然の訃報に驚いた。「市民会議」の皆さまには中島さんにつづいての笹本さんの逝去で大変でしょうが、これからも共に頑張っていただけだからと思っている。

次に笹本さんが故郷でお世話になった福原孝浩さんの追悼の辞を記す。

「笹本さんは益田市内から約二〇キロ入った匹見の地で、幼少期から中学時代まで過ごされた。その後益田高校を卒業するまで益田市内で過ごし、上京して大学で学ばれた。私との出会いは一九九〇年頃からで、毎年正月にお母さんを見舞うため来益され親交が始まった。お母さんは

八年前になくなられた。広島、東京で会う度に彼が執筆した著書・小論などを贈られた。

今年一月の大雪の中、広島から突然益田に立ち寄られ、久し振りに熱い思いを聞かせていただいたのが最後になった。

三月末彼の故郷匹見でしめやかに法要の労を執らせていただいた。お母さんのそばに埋葬してお別れとなった。

「一瞬一生」が彼の座右であった。部屋の中に笹本さんの在りし日の写真を飾って毎日手を合わせている。

「一日一生」

詩集 いずも

笹本征男

土曜美術社出版販売

詩集 いずも 笹本征男著 〈土曜美術社出版販売〉

現在絶版ですが、多少在庫ありますのでご希望の方は実費でおわけします。

連絡先：アーク印刷（株）及川
まで電話 090-4818-7709



匹見にある笹本家のお墓。お母さんの横に埋葬。

―笹本征男詩集『いずも』より―

ハックルベリーフィンの夜

夜の川

ヘミングウェイのミシシッピー河にいる

舟の上で燃えるアセチレンガス燈

川面が輝く

父が投網を投げる

手繰られる投網の中に鮎の銀色の体がおどる

船首にいるハックルベリーフィンの私

竹竿を川底に押しつける

網から鮎をはずし生け簀に入れる

夜が明けて樽に鮎が詰められ

塩をまぶされ魚市場に送られる

夏の夜の中で若い父とハックルベリーフィンがいる

(二〇〇二年十一月三日、記)

裏山のほの明るさ

敗戦の年の一九四五年

父は三十半ばを過ぎていた

父に召集令状が来て

集結地は広島市だった

父は八月のあの日近く

あの都市に行くことになっていた

しかし、あの日

父は故郷の島根にまだいた

あの日の朝

故郷の裏山のあたりがほの明るくなったという

その裏山は父の勤めていた発電所の

貯水場があるところ

そこは子供の私たちの遊び場

村が一望できた

村からも被爆者が出ている

発電所の父の同僚の兄さんも

親戚の叔父も

あの日

あの都市にいた

あの朝の故郷の裏山のほの明るさ

それはあの瞬間だった

(二〇〇二年十一月五日、記)

笹本征男兄さんのこと

高一一三

笹本征男は孤独な男だった。孤独が彼の思考様式、行動を規定していた。孤独だからこそ誰よりも強く愛を求めたし、だが守るべきものを持ちたくもなかった。喪うものを持たないがゆえに強く生きられたが、酒を呑むと人恋しくなり、会った人と別れがたくなった。誰も待つ者がいない部屋に帰るのが苦痛になるのだった。それにしても、誰にも看取られずに死ぬなんて……本人にも思いが及ばなかっただろう。孤独を象徴して余りある死に方だった。

僕は笹本征男を時に「兄さん」と呼んだ。彼が発痛して死に直面するようになってから意識的に「兄さん」と呼ぶようにしたのだ。死を前にした彼は爆発的な活躍をした。いつも、これからやりたいと思っていることを延々と、しかも熱っぽく語るのだった。「兄さん」、すべてを遣り切ることはできないから、優先順位をつけよう。そうでないと結局何もできないで終わってしまう。果たして、やりたいと思ったこと、どれだけが実現できたのだろうか、わからない。笹本征男とは知り合う前から同時代を併走するように生きていた。いつもちょっとだけ彼が先を行っていたが、中央大学も一緒だし、思想

の科学をめぐる話も合うし、在日朝鮮人のことを話してもよく解る。知らなかっただけで、身近で互いに生きてきたのだ。彼の遺言状とも言うべき「米軍占領下の原爆調査」を作る時、「原爆加害国になった日本」という副題（サブタイトル）を提案したら、その場で決めてしまった。ものごとを熟慮するように見えながら直感的だった。

笹本征男は死んで風となり、彼の友たちの記憶の中で生きることになった。いつでも一緒だ。心底、天涯孤独もいいかも知れないと思う。今は笹本征男の遺していった仕事、どのような評価の変遷を遂げるのか見守るだけだ。桜の木の下で黒毡のキーポトルとともに。

笹本征男さんを偲ぶ

知人の電話で笹本さんの訃報を知り驚いた。

昨年末、ある研究会で彼と偶然に会った。「おお、しばらくだなあ、元氣か」という声を掛け合っただけでわかれた。これが最後だった。晴天の霹靂だった。3月20日（土）は私が主宰する研究会が東京の飯田橋であり彼にも案内状を出していた。この数年私自身も体調を崩し精神が混乱しいまだに落ち着かない。時間が過ぎるのを



左が笹本家のお墓。山桜が満開。

猪野修治（湘南科学史懇話会・代表）

待つしかない。

思い起こせば、1996年の春であつたらうか。『米軍占領下の原爆調査 原爆加害国になった日本』（新幹社、1995）を読んで身が震えるほどの感動を覚えた。内容も文体も怒りに満ちている。私はなんども読み返した。全力を投入し長い書評「原爆被爆調査神話を新たな視点で解体する」〔『化学史研究』第23巻、第1号、1996〕を書いた。

その後、深く読み込んだ本書と書評を持って新幹社で初めて会った。同世代の私たちは意気投合し飲み屋に駆けつけ長い人生論議をやった。彼は歓喜していた。以来十数年余、密な相互交流と種々の研究会を実施した。若い世代には反論の余地を与えない、独善的側面もあったが、同世代の私たちは公私共に思いのたけを一刀直入に語りあった。その議論を通じて私は一方的に多くの社会的な諸問題（特に被爆問題）

笹本征男さんを追悼する

笹本さんと会ったのは、²⁰⁰⁴2004年2月に東工大の科学史の火ゼミで「米軍占領下の原爆調査」の研究発表されたときだった。そのときは「ずいぶん乱暴なことを言う人」という印象だった。笹本さんを囲んだ夕食のとき、私は読売新聞の原子力平和利用キャンペーンを調べていたので、「論文が出たら、第五福竜丸の元乗組員の人（大石又七さん）に送るつもりだ」と言った。それを聞いた笹本さんの目の輝きの変化を、今も覚えている。笹本さんは、大石さん主宰の「マグロ塚を作る会」の運動を支えていたのだ。その席で、笹本さんから私に質問が続き、同じ年の生まれであることなどが分かった。

の教えを受け学んだことはたしかである。真に情念的な独立の占領史研究者であった。

存在からして文学人でもあった。社会的弱者の立場から一貫した情念的社会批判は多くの人を魅了し感動させた。埴谷雄高のような小説を書きたいと繰り返し言っていた。いまごろは暗黒の宇宙を駆け回っていることだろう。ご冥福を祈るばかりである。合掌。

山崎正勝（東京工業大学・名誉教授（科学史））

その後、私も「マグロ塚を作る会」に参加するようになり、大石さんとも知り合いになった。笹本さんは、ものの感じ方や考え方が、私とずいぶん違っていたが、同じ方向を指しているのが分かり、笹本さんは最良の友人になった。

私は、女子文化大学の研究会「国際関係と科学・技術」に、笹本さんをお誘いした。笹本さんは、たちまち研究会の有力メンバーになり、昨年3月に、研究会を中心に、東工大で「日韓核問題国際シンポジウム」を開催したとき、笹本さんは「朝鮮人・韓国人原爆被爆者・米・日・韓・朝関係の狭間で」とい

う講演をされた。この講演は、科学史学会の欧文誌に英文で昨年末に公表された。

昨年の8月には「冷戦期の原爆症と核政策」に出席するため、一緒に英国のケンブリッジ大学のニータム研究所に出かけた。その後、スタンフォード大学のバーンスタイン教授が笹本さんの英訳論文を読んで、笹本さんと連絡を取りたいというメールが私のところに入り、交流の準備が進んでいた。また、^{ABCC}ABCCについて著書があるペンシルバニア大学のリンディー教授が、夏に来日の際、笹本さんに会いたいとの話が私のところに来た。早速、入院先の東京医療センターで笹本さんに伝えるところ、大変、喜んでおられた。国際的にも注目され始めていた時だけに、あと半年でも生きていてくれたらと思う。私にとつては、最後の数年をともにできたのが、せめてもの救いであった。



笹本征男さんを偲ぶ

NHK報道局チーフ・ディレクター 中村直文

忘れもしません。笹本さんの訃報を聞いたとき、私は熱海のある画家のアトリエで取材中でした。「いのち」をテーマに5年に渡って描き続けた作品がようやく完成した、まさにその日。一日中、春の嵐が吹き荒れ、病院から後輩のディレクターの電話を受けた後、茫然自失の中で、ゴウゴウと鳴っていた海鳴りの音が今も耳に焼き付いています…。

笹本さんのお付き合いは、振り返ってみれば6年ほどしかありません。笹本さんの長い人生にとっては、新参者で、しかも親子ほど年が離れた私や同僚・後輩の制作者たちと、笹本さんとは親しく付き合ってくださいました。闘病中にも関わらず、番組制作に最大限のご協力を頂き、歴史家の目線で、番組の内容にも忌憚らない意見を述べられ、取材協力者という立場を超えて、私たちの支えとなってくださいました。「歴史」や「戦争」というフィールドで取材する人間にとって何よりも得難い、さまざまな物の見方も教えて頂きました。笹本さんの清貧ともいべき生き様から、肩書きや、おカネではなく、人にとって大事なものは「志」であ

ることを改めて学びました。それにしても…。

あまりにも早すぎませんか。笹本さん。もっとお話があった…。8月に放送予定の、広島のスズメも見て欲しかった…。「阿片」の本にも寄稿して頂きたかった…。来年放送予定の、戦争の企画の相談にも乗ってほしかった…。ほかのディレクターたちも、きっと笹本さんに相談に乗ってもらおうと、首を長くして待っていたと思います。あと少しだけでも、ご一緒したかった…。

偶然にも、笹本さんがこの世を去られた日

市民科学史家・笹本征男さんを偲ぶ

上田昌文 (NPO法人市民科学研究室・代表)

市民科学研究室の低線量被曝研究会は『ECRR報告書』を読み解きながら放射線防護のあり方の問題点を探っていくことから活動を開始したが(2004年4月)、当初から参加した数人のメンバーの中に笹本征男さんが含まれていた時点で、この研究会が日米原爆合

に完成した「いのち」の絵。その画家も、父母の死と向き合いながら絵を描いたのですが、その画家がたまたまインタビューで語った言葉が、ぼっかり穴のあいた私の心に染みいりました。

「いのちというのは、亡くなったから失せるものではないと思うのです。人間でしたらその人の心が残るのです。周りの人に残って、それがまた次の人に残っていく。いのちとはそういうものではないでしょうか…。」

そうですね。笹本さんの「心」は、きっと多くの人びとの心に残っていますよね。私たちは、それを「番組」という形で伝えることで、笹本さんが生きた証をこの世に刻んでいければと、切に願っています。

同調査を歴史的にも(それがいかにして成立しどう実施されたか)、科学的にも(現在の防護体系の基礎データとされてきた調査内容をどう評価し得るか)今一度深く検証することへと向かっていくのは、必然だったと言えかもしれない。畢生の歴史研究であり執念の

著作である『米軍占領下の原爆調査』を生み出したその人の存在感は大きかった。在野にあって何らの安定した報酬や見返りも望み得ないかわりに、「大量虐殺を受けた側が、それをなした側に全面協力して、その大量虐殺兵器の効果を徹底的に科学調査し、その成果を余すところなく提供する、という転倒がなぜ成立したのか」という根源的な問を手放さず、それを学問的に、そして自身をも含めて背負うべき倫理・責任の問題として、執拗に追究する笹本さんの姿——自由な批判精神を体現したその姿に、やはりメンバーの皆が圧倒されていたのだと思う。

『米軍占領下の原爆調査』で提起した問いを年下の世代の仲間と一緒にさらに深く検証する作業がまさに軌道に乗ってきた時期に（その成果の一端は今年の8月6日の広島放送局のNHKスペシャルに反映されるだろう）、そして英語圏での学術発表によって（2009年英国ケンブリッジにて）幾人もの有力な海外の研究者の注目を集め始めた矢先に、急逝されたことは、かえすかえすも残念であり、笹本さんの胸中、その無念さはいかばかりであったろうか。研究会で、持ち寄った資料を手に延々と議論を続けながら、笹本さんが私たちに伝えたのは、「隠蔽されたかに見える支配者層や科学者コミュニティの真

意や駆け引きの真相をあぶり出すためには、小さな事実を緻密に発掘して積み上げていく努力を怠ってはならない」ということだったと思う。そして私たちメンバーは、「市民科学史家」笹本征男の薫陶を受けて菓立とうともがいている雛鳥の群れだった、と言えるのではないか。

笹本さんは、ガンを患っていることからくる障害により生活保護を受けておられた。自身の身体のつらさのことはほとんど口にされ

笹本征男さんありがとう

渡辺 峯

笹本さんとは1988年、在韓被爆者問題市民会議という長い名前の、しかしささやかな市民団体の結成に加わった時からおつき合いです。笹本さんは学生時代から、この会の発起人でありリーダーだった亡き中島竜美さんとはお親しかったようで、会の発足当初から中島さんを助けてよくその中心的な働きをして下さいました。はじめの頃、彼の難しい文章やお話に些かたじたじだった私ですが、次第に、その何とも言えず優しいお人柄、議論の中で通じ合った時の嬉しそうな笑顔に魅せられて親しくさせて頂くようになりました。

ることはなかったが、収入のあまり期待できないNPO活動に専念する私の身を人一倍気にかけてくださって、活動をとおして少しとまったお金が入ったりした時に、それをお伝えしたりすると、「よかった、よかった」と我が事のように喜んでくださった。あの澄んだ大きな瞳、あの暖かい微笑みを二度と目にする事ができないのか、と思うと、悲しくてならない。

2002年のご入院は一同にとってショックでした。でも石川さんたちとお見舞いに伺った時の笹本さんの意外な落ち着き、明るさは、後に出された詩集『いずも』の巻末の詩、『奪う』に通じる何かがあったのではないうでしようか。私がカナダのお友達から頂いた美しい紅葉のお見舞いカードを差し上げた時、ご出身の出雲の秋と通じる所があったのか、とても喜んでくださったのが心に残ります。

2005年、お仲間の石川さん、銀林さんのお世話で出版された笹本さんの詩集『いず

も』を頂いて一読し、大きな驚きと感動にうたれましました。今まで詩を書かなかった方が、突如こんな素晴らしい、率直な、心を打つ詩を書かれるなんて・・・しかもその殆どが1ヶ月足らずのうちに書かれているのです。いのちと向き合うことがどんな素晴らしいものを生み出すかを改めて思いました。

それから5年、杖をつきながらも元気に運営

委員会などに出て、及川さんと共に会の代表を勤めておられた笹本さんの死は、私たちにとつてやはり突然のものでした。でも死にも「奪えないもの」があるのです。長年のお交わりの中で分け合ってきた大切なものを大事にしながらこれからも歩み続けたいと思っています。笹本さん、本当に有難うございました。

笹本征男ゆっくりお休みください

石川逸子

思えば、在韓被爆者問題市民会議立ち上げの頃のあなたは、研究のこと以外、目に入らない人。発送作業中、研究分野にうっかり水を向けようものなら、手が止まって目はギラ

ひたむきな、その情熱あればこそ、大著『米軍占領下の原爆調査』を完成させることができたのだ、と今はわかります。

ギラ。あ、作業中は笹本さんに声をかけてはいけない、と思ったものでした。あるとき、途中で封筒が足りなくなり、あなたが買いに行つてくれたのはいいけれど、買ってきた封筒を見て、啞然。どう会報を折り畳もうと絶対入りっこない小さな小さな封筒を、あなたはたくさん買ってきて、澄ましているのですから。

専修大学でなさった講演で、アルバイトの掃除作業を終え、トレパン姿のまま駆けつけ、講義されたあなたの姿も、忘れられません。

でも何よりのサブライズは、ガンを患ったあなたが、突然、詩人になったこと。運営委員会のあと、「読んで見て下さい」と何気なく渡された分厚い詩篇を、家へ帰って読んでたときの驚き。研究一筋と生きていたあなたが、繊細な感性を隠しもち、みごとな表現で詩を生み出されたとは！そのままにしておくのは惜しくなり、詩集『いずも』が誕生しました。

でも何よりのサブライズは、ガンを患ったあなたが、突然、詩人になったこと。運営委員会のあと、「読んで見て下さい」と何気なく渡された分厚い詩篇を、家へ帰って読んでたときの驚き。研究一筋と生きていたあなたが、繊細な感性を隠しもち、みごとな表現で詩を生み出されたとは！そのままにしておくのは惜しくなり、詩集『いずも』が誕生しました。

笹本さん、ガンになってからのあなたは、本当に前向きで、全てにアクティブでしたね。あなたが最も敬愛し、あなたの日常生活まで世話していた中島龍美さんが亡くなられたときは、落ちこんでしまうのではと、ひそかに心配しましたけれど、中島さんの後を継ぎ、市民会議代表として、杖を突きながら、頼もしく活躍して下さいました。

最後にお会いしたのは、一月の運営委員会。そのとき、渡して下さいました、香月泰男についてのエッセーも、心に残るものでした。腰が痛いと言われていても、それが命取りになるとは思ってもいなくて・・・。命尽きるまで走り続けた笹本さん。どうか、ゆっくりお休み下さい。



笹本さんを偲ぶ

有岡道夫（在韓被爆者市民会議運営委員）

在外被爆者救済が被曝後60年を過ぎてようやく前進をみたところで、中島竜美さんに続いて笹本さんという2本柱を失った。

笹本さんと親しくお付き合いを願うようになったのは、9年前会社勤めを卒業して時間ができたのを機に市民会議の運営委員に加えていただいて以来である。それまで例会や総会に時々出席したが、こんなことは思ってもみなかったので中島さんにしても笹本さんにしても、あまり個別の印象がない。なんとなく冷静沈着な学者タイプの方からレクチュアを受けているという感じであった。

運営委員会は概ね淡々と進行する。終了後、男性諸氏は軽く食事をといることになるが、その場はガラッと変わる。笹本さんがこんなに熱い人なんだと思い知った。話題に上ったことには一刀両断、善し悪しを決め付ける。熱く語る。そして頑固である。病を得られてからはその傾

向がさらに顕著になったような気がする。病との闘いが結論を急がせたのだろうか。

彼の原爆研究は、被害国日本が実は「原爆加害国」になっていったという結論に達し、生涯の著書「米軍占領下の原爆調査」の根幹をなしている。このことに憤る正義感がその後の半生を貫いたと推測する。

私事だが、晩はお酒を飲んで主食の類は口にしないという習慣が身につけていて、委員会の食事会、餃子、タンメン、ビールを同時に注文して慌しく飲む・食う・しゃべるというスタイルに馴染めず失礼することが多かった。もっとお付き合いしておればいろいろ貴重な話を聞き出せたのにと悔いが残る。また、私は昨年末に骨折をして長期の入院生活を送る破目になり、お目にかからぬままになってしまった。かえすがえす残念である。ご冥福を祈る。

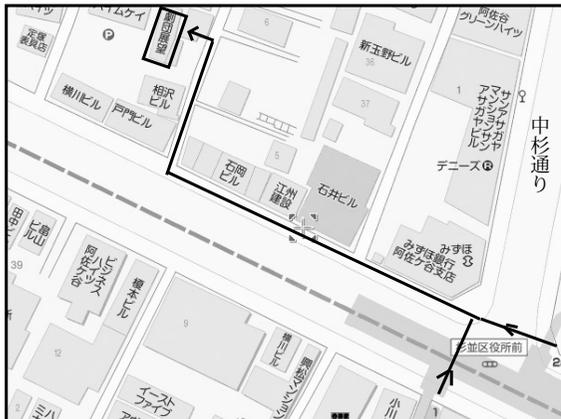
☆在韓被爆者問題市民会議総会のご案内☆

左記の日程で総会を開催いたしますのでご参加ください。

日時 7月3日（土）午前十時半より

場所 劇団『展望』（地図は下記を参照ください）

会場地図



笹本征男さんを偲ぶ会を開催します

日時：7月3日（土）13時半より

場所：劇団『展望』

住所：

東京都杉並区阿佐谷南3丁目3-32

電話 03-3393-2739

（左記の地図参照）

会場費：500円

最寄り駅：

南阿佐ヶ谷駅（東京メトロ丸ノ内線）。

駅から徒歩約2分